
ブイ系と共に

sh

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

バイ系と共に

【Nコード】

N1802Q

【作者名】

sh

【あらすじ】

転生した少女リカがアニメポケットモンスターの世界を冒険する物語です。

第1話 出発前日

明日は私を含め5人のトレーナーがポケモンを貰い（私以外）、ここ『マサラタウン』を旅立つ。

私は元々マサラではなくタマムシの産まれで5歳のときにこっちに引っ越してきたのだ。

その理由というのが、当時タマムシ大学でイーブイの研究をしていた両親に3歳の誕生日プレゼントにポケモンが欲しいとねだり、ちようど産まれたばかりの卵を貰った。

3歳の子供がなぜポケモンを持つことを許したかと言うと私が転生者で精神が早熟しているからだろう。

転生に関しては、テンプレ的な内容なので省略するとして、貰った能力はくじ引きでヴィジョンアイ（制限なし）・念話能力・物質複製能力（触っているもののみ生き物不可）と微妙なものばかりだ。

だいぶ話がそれたが、普通1つの卵からは1匹しか生まれないのだが、私が貰った卵からは5匹のイーブイが産まれたのだ。

それだけなら、当時オーキド博士の助手をしていたウツギ博士を派遣してもらって、タマムシ大学でも研究できたのだ。

もっとも、調べても何も解らず半年後ウツギ博士は帰っていった。

しかし、私が4歳になったある休日の日に、両親の助手のエリカ姉さまに連れられて、エリカ姉さまの母（名前は知らない）がジムリーダーをしているタマムシジムに遊びに行った。

そこで1匹のイーブイが置物の苔の生えた岩に触れ、リーフィアに進化してしまった。

カントーではリーフィアに進化出来ないはずが進化し、地域でレベルアップするのが進化条件なのに石で進化をしたためパニックになった。

何分謎の多い特殊なイーブイなのでもしかしたらと残りの4匹にも岩に触らせたが進化しなかった。

もしや、進化できない体質なのかと水の石・雷の石・炎の石を当ててみたら3匹とも進化した（1匹は石に触るのを拒否した）。

調査に行き詰ったとき、都合のいいことにちょうどオーキド博士の研究所にポケモン進化研究の第一人者のナナカマド博士が仕事でしばらく滞在すると聞き、リーフィアと私を引き離せないという理由からマサラタウンに引越して、リーフィアとジムリーダーから買い取った岩調べてもらうことになった。

結果からいうと、原因は岩の内部にあった。

岩の内部には苔のような物が入った透明な結晶がいくつもあり、それに触った父のイーブイも進化したことから、『苔の石』と名づけられた。

私のイーブイはどうやら岩の一部が欠けており、そこから覗き出た苔の石に触れてしまい進化したようだ。

予断だが、カントーの各地で苔の石が見つかりカントーに生息する

ポケモンにリーフィアが加えられるのはその数年後の出来事だった。数年単位で行われると予想された研究が予想より圧倒的に早く終わったため、また引越すのかと思ったが何度も引越すのも大変だし大学の教授職も辞めてきてしまったため、母は専業主婦になり父はこのままオーキド研究所で働かせてもらうことになった。

それから5年イーブイたちを育てた。

ゲームと違いマサラ周辺でも色々なポケモンが出るため時間はかかったが経験値や努力値を十分稼ぐ事が出来た。

ポケモンも強化したし、自炊や旅に必要な知識も勉強した。

専らの悩みは…

「お姉さま〜」

そう言って顔を赤らめ飛びついてくるこいつだ。

私はこんな口調か性格の所為か（少なくとも外見ではないだろう）この手の女子に言い寄られることが多い。

特に過激なのがこのミハルだ。

名前や性癖だけでなく外見もバカテスの清水美春そっくりなのだ。

「ミハル離れる」

そう言いながら私はミハルの頭を押して引き剥がそうとする。

それでもしがみ付いたまま

「お姉さま、一緒に旅の準備しましょう」

「もうやった」

そうそっけなく言っても

「じゃあ、ミハルの準備手伝ってください」

「明日から旅に出るんだから自分でしなさい」

「いいじゃないですか、一緒に行動するのですし」

そう、これなのだ。

女の子の一人旅は危険だと、私の両親とミハルの両親に言われ一緒に旅をすることになった。

こっちのほう^が身の危険を感じるのは何でだろうか？

その後何だかんだあ^って結局手^伝うことになった。

そつえばまだ名前を言っていなかったな

「私の名前はリ力だ」

「何かおっしゃいます?」

「いや、なんでもない」

設定 第8話まで（ネタバレあり）（前書き）

ここに書かれている技はあくまで最新話時点での覚えている技です。

設定 第8話まで（ネタバレあり）

設定（ネタバレ注意）

主要登場人物

名前：リカ

性別：

年齢：転生前12歳 現在10歳

リカ手持ちポケモン

名前：シャワーズ

レベル：100

性別：

性格：ひかえめ

努力値：HP 252 特攻 252 防御 6

特性：貯水

物理技：たいあたり・でんこうせっか・かみつく・とつておき・アイアンテール・あなをほる・たきのぼり・のしかかり

特殊技：なみのり・しおみず・シャドーボール・はかいこうせん・ふぶき・れいとうビーム・みずのはどう・ハイドロポンプ・オーロラビーム・みずでっぽう・ここえるかせ・どろかけ・スピードスター

補助技：すなかけ・アクアリング・とける・ほえる・まもる・あまごい・かげぶんしん・メロメロ・ねむる・こらえる・ねごと・あくび

名前：ブースター

レベル：100

性別：

性格：おくびょう

努力値：素早さ 252・攻撃 128・特攻 128

特性：もらい火

物理技：ギガインパクト・あなをほる・アイアンテール・とつ

しん・ほのおのキバ・かみつく・でんこうせっか・のしかかり・か
いりき・いわくだき

特殊技：ひのこ・ほのおのうず・かえんほうしゃ・スモッグ・だい
もんじ・はかいこうせん・シャドーボール・オーバーヒート・ね
つぶう・スピードスター

補助技：こらえる・あくび・ほえる・まもる・にほんばれ・かげぶ
んしん・メロメロ・おにび・すなかけ

名前：サンダース

レベル：100

性別：

性格：さみしがり

努力値：素早さ252・攻撃128・特攻128

特性：蓄電

物理技：アイアンテール・あなをほる・でんこうせっか・かみつく・
にどげり・ミサイルばり・かみなりのキバ・とつておき・ギガイン
パクト

特殊技：はかいこうせん・10まんボルト・かみなり・シャドーボ

ール・でんげきは・チャージビーム・でんきショック・ほうでん・
シグナルビーム・スピードスター・のしかかり

補助技：こらえる・あくび・ほえる・まもる・あまごい・かげぶん
しん・メロメロ・こらえる・でんじは・こうそくいどう・フラッシュ

名前：リーファイア

レベル：100

性別：

性格：むじゃき

努力値：素早252・攻252

特性：リーフガード

物理技：リーフブレード・タネばくだん・タネマシンガン・シザー
クロス・つばめがえし・でんこうせっか・はっぱカッター・かみ
つく・のしかかり・すてみタックル

特殊技：ギガドレイン・くさむずび・めざめるパワー（炎）・シャ
ドーボール・マジカルリーフ・スピードスター

補助技：ふるいたてる・つるぎのまい・うそなき・くすぐる・あま
える・あくび・にほんばれ・こうこうせい・くさぶえ・メロメロ・

まもる

名前：イーブイ

レベル：100

性別：

性格：さみしがり

努力値：攻252・素早252

特性：てきおうりよく

物理技：たいあたり・でんこうせっか・かみつく・とっしん・とつておき・アイアンテール・あなをほる・のしかかり・すてみタックル・ずつき

特殊技：シャドーボール

補助技：すなかけ・あまえる・こらえる・くすぐる・ねがいごと・あくび・みきり・まもる・メロメロ・かげぶんしん

名前：ミハル

性別：

年齢：10歳

容姿：バカテスの清水美春を幼くした感じ

ミハル手持ちポケモン

名前：ヒトカゲ

レベル：8

性別：

性格：すなお

努力値：特攻1・防御1

特性：もっか

物理技：ひつかく・メタルクロー

特殊技：ひのこ

補助技：なきごえ

名前：ヒトデマン

レベル：25

性別：

性格：ひかえめ

努力値：特防1・防御1

特性：しぜんかいふく

物理技：たいあたり・こうそくスピン

特殊技：みずでっぼう・バブルこうせん・スピードスター

補助技：

名前：ニドラン

レベル：4

性別：

性格：ゆうかん

努力値：

特性：どくのトゲ

物理技：ひっかく・どくばり

特殊技：

補助技：なきごえ

名前：マンキー

レベル：3

性別：

性格：やんちゃ

努力値：

特 性：やるき

物理技：ひっかく・からてチョップ

特殊技：

補助技：にらみつける

名 前：オニスズメ

レベル：5

性 別：

性 格：やんちゃ

努力値：

特 性：するどいめ

物理技：つつく・みだれづき

特殊技：

補助技：にらみつける・なきごえ

名前：イヴ

性別：

年齢：8歳

容姿：BLACK CATのイヴとポケスぺのイエローを足して
2で割った感じ

イヴ手持ちポケモン

名前：ドードー

レベル：25

性別：

性 格：さみしがり

努力値：

特 性：にげあし

物理技：つつく・でんこうせっか・みだれづき・おいうち・だまし
うち

特殊技：

補助技：なきごえ・まもる・オウムがえし

名 前：ピカチュウ

レベル：27

性 別：

性 格：ひかえめ

努力値：

特 性：せいでんき

物理技：でんこうせっか・アイアンテール・かみなりパンチ

特殊技：でんきショック・10まんボルト・シグナルビーム

補助技：でんじは・しっぱをふる・かげぶんしん

準主要登場人物

名前：シゲル

性別：

年齢：10歳

容姿：アニメのまま

備考：原作ライバルキャラ

シゲル手持ちポケモン

ゼニガメ

名前：シンジ

性別：

年齢：10歳

容姿：F a t eの間桐慎二を幼くした感じ

備考：オリジナルキャラ

シンジ手持ちポケモン

フシギダネ

名前：サトシ

性別：

年齢：10歳

容姿：アニメのまま

備考：原作主人公キャラ

サトシ手持ちポケモン

ピカチュウ

名前：カスミ

性別：

年齢：10歳

容姿：アニメのまま

備考：原作ヒロインキャラ

カスミ手持ちポケモン

不明

この世界のルール

- ・バトンタッチ禁止
- ・眠って30秒以内に何の行動も取らなかった場合戦闘不能

- ・技はいくつ覚えさせてもいいが公式大会ではその内最大4つ技を選択しそれ以外を使つてはいけない
- ・ポケモンに道具を持たせてバトルをしてはいけない。
- ・技マシン及び秘伝マシンは存在せず、自力で覚えられる。
- ・レベルと覚える技に関連性は無い（例：レベル5のフシギダネがはっぱカッターは使えるがつつるのむちは使えない）
- ・ここはアニメポケの世界なのですばやさ〃回避力ではありませんが多分に影響される（アニメでも攻撃を避けられると、周りが「あのかなりのスピードだ」みたいな表現をたまに見るので）
- ・図鑑にのみ機能あり

設定 第8話まで（ネタバレあり）（後書き）

水上 流霞様ご指摘ありがとうございます。

一部加筆しました。

指摘内容で加筆も修正もされていないものは、本編や過去話で出す
予定ですのでご容赦を。

第2話 ミハル、お姉さまとの出会いと最初のポケモン

Side ミハル

私は図鑑とポケモンを貰うため、お姉さまと共にオーキド研究所に向かっていますわ。

私の選ぶポケモンは決まっています。

ヒトカゲ、このポケモンを選ぶのには理由があります。

あれはお姉さまと出会ったときのことです。

~~~~~回想~~~~~

昔の私は人と接するのが怖くて、性格が暗く同じ年頃の男子たちに苛められていました。

そんなある日、亡くなったお婆様の形見のペンダントを盗られて返してと泣きながら追いかけていましたが、石に躓き走っていた私の体は宙に浮き木に頭から激突しました。

しかも運悪くその木にはスピアーの巣があり、怒ったスピアーが何十匹も出てきました。

男子たちはペンダントを捨て一目散に逃げていき、倒れこんでいた

私はあつという間にスピアーに囲まれてしまいました。

もう駄目だと思ったとき

「セツト！かえんほうしゃ」

と言うのが後ろから聞こえ、私は何かに引っ張られスピアーの群れの外に来ていました。

そこで見たのは純白の髪をした私と同じ年くらいの女の子でした。

この女の子の事は噂で知っています。

他の町では違うようですが、この辺一帯ではこの年でポケモンを持たせてもらえないので、唯一持っているブイ系を連れた女の子の噂はとても有名です。

「リーフィア、その子をお願い」

そう言う後ろから

「フィア！」

と聞こえ、そこには最近カントーに生息するポケモンとして登録されたリーフィアが居ました。

どうやら私を引っ張ったのはこの子ようです。

この小さな体のどこに子供とはいえ人一人銜えてあのスピードで走るパワーがあるのでしょうか？

そしてその女の子はブースターとスピアーの群れに向かっていき、

「ブースター！」

そう言うともまるで細かい指示を受けているかのようにブースターは駆けていき

「セフト！かえんほうしゃ」

そういうとブースターは女の子が指差した所を正確に打ち抜いていきます。

リーフィアはこっちに飛んできた流れ弾をまもるで防いだり、スピードスターで打ち落したりしてくれました

よく見てみるとブースターは必ず視界のどこかにトレーナーの女の子が入るように行動していました。

スピアーも女の子の的確な指示に気付き、女の子も狙い始めました。

女の子は死角からの攻撃も避けブースターが撃墜し、背後から忍び寄ってきたスピアーにも攻撃の指示を出していました。

その光景は炎の中で舞っているようで、とても幻想的でした。

私が惚けているといつの間にか戦闘が終わっていました。

~~~~~回想終了~~~~~

それから私は変わったと思います。

対人恐怖症は治りましたが大の男嫌いになりました。

例外はお父様とオーキド研究所の方々くらいでしょう。

特に嫌いののは、シゲル・サトシ・シンジの3人です。

シゲルは尊敬している祖父の研究を手伝っているお姉さまに嫉妬して突っかかってくることがあります。

お姉さまに手を出すなど許しません。

サトシはお姉さまと家が隣なのをいいことに朝お姉さまに起こしてもらったり、お姉さまの部屋によく出入りしたり、なんて羨まし…ゲフンゲフン…と、とにかく嫌いです。

シンジは昔私を苛めていたクソ野郎なので語るまでもありません。

だいが話がそれましたが、あの幻想的な光景を見て以来最初に貰うポケモンはヒトカゲと決めているのです。

研究所に着くとシゲルとシンジが来ていました。

サトシ？知りません、お姉さまが何度起こしても起きず結局ハナコさんに遅刻するからと先に行くことになったのですから。

「サトシが来ておらん様じゃが、時間だからの。」

まずはこれがポケモン図鑑と予備のモンスターボールじゃ」

そう言って私たちはポケモン図鑑とモンスターボールを受け取りました。

「リカ君はいいんじゃないかな、では3人とも最初のポケモンを選ぶのじゃ」

そう言って博士はボールからヒトカゲ・ゼニガメ・フシギダネを出した。

「僕はすでに決めている」

シゲルはそう言っただけでゼニガメのモンスターボールを手に取ります。

「フシギダネは3匹の中で1番成長が早いんだ」

そう言ってシンジはフシギダネのボールを手に取ります。

目当てのヒトカゲが手に入るから別にいいのですが、この2人にはレディーファーストというのを知らないのでしょうか？

私がヒトカゲをボールに戻そうとするとシンジが

「待ちたまえ、せっかくポケモンを貰ったんだボクがポケモンバトルというものを君に教えてあげよう」

「シンジにポケモンバトルを教えられるとは思えないが、リーカくん君とは1度戦ってみたかったんだ君とミールくん対僕とシンジのタッグバトルといこうじゃないか」

こうして私の初めてのバトルの火蓋が切って落とされた。

S i d e o u t

第2話 ミハル、お姉さまとの出会いと最初のポケモン（後書き）

初めてのバトルシーンなので情景をうまく書けていたでしょうか

第3話 ミハル、初バトルはタッグバトル

S i d e ミハル

5人でそろそろと庭に行き、私とお姉さま、シゲルとシンジの2組に分かれました。

それを見て博士が合図をかけます。

「これよりシゲル・シンジペア対リカ・ミハルペアのタッグバトルを始める！試合開始！」

「行け！ゼニガメ」

「出て来いフシギダネ」

「頑張つて！ヒトカゲ」

「イーブイ！S e t u p」

そう言つて私たちはポケモンを出しました。

「先手必勝！フシギダネはっぱカッター」

いきなりシンジのフシギダネがヒトカゲを攻撃してきました。

えっ！？トレーナーとのバトルのときは先攻後攻決めてから始めるのがマナーではないのですか！？

博士もお姉さまも顔を少し顰めるだけで注意しませんでした。

ルールではなくマナーの違反だからでしょうか？

それよりも混乱して回避の指示が遅くなってしまい回避の指示が間に合いません。

「イーブイ、まもる」

それをお姉さまのイーブイが割って入り、半透明の膜が攻撃を防いだ。

ほっとしているといつの間にかヒトカゲの横にゼニガメが来ており、

「ゼニガメ、あわ」

距離的に回避は間に合わないから相殺しようとする指示を出す

「えっと、ヒトカゲかえんほうしゃ」

ヒトカゲはこつちを驚いたように振り返るだけで火を吐かずあわが当たってしまいました。

「その子、まだかえんほうしゃ覚えてないのじゃないか？ 図鑑で覚えてる技見れるから見てみる。」

いつの間にか近くに来ていたお姉さまがそう言いました。

もう倒し終わったのかとイーブイを見るとフシギダネにくすぐるをして無力していました。

シゲルは助けようとあわを放つもイーブイはフシギダネが盾になる位置に移動しくすぐるをし、接近戦を挑むもイーブイはみきりを使い避け、すぐさまくすぐるを再開するのでフシギダネのみが傷ついてしまうため攻めあぐねていました。

私は図鑑を開き技のデータを表示させました。

表示された技は、ひっかく・なきごえ・ひのこ・メタルクローの4つでした。

「それじゃあフシギダネのほうは任せた。」

セツト！シャドーボール」

そう言うといーブイはジャンプをして、お姉さまの指差したゼニガメに向かってシャドウボールを放ち、ゼニガメを戦闘不能にしました。

無傷のゼニガメを一撃ってどれだけの威力があるのですか！？あのシャドーボール。

それにしてもいーブイ、あの状況でもちゃんと見ているんですね。

「ヒトカゲ、フシギダネにひのこ」

すでに満身創痍のフシギダネは一撃で戦闘不能になりました。

「勝負あり！勝者リカ・ミハルペア」

博士の宣言でようやく勝ったという事を認識しました。

私はほとんど何もしてませんが…まあ、勝ちですよね。

私は嬉しさのあまり、ヒトカゲに抱きついてブンブン振り回しながら喜びました。

私がトリップしている間に、シンジがシゲルにあたり、怒ったシゲルとシンジが喧嘩したりしていたようです。

私が正気に戻ったのは、シンジが出て行きお姉さまに声をかけられてからです。

「そのヒトカゲ大丈夫か？」

お姉さまの一言で正気に戻り、抱きしめたヒトカゲを見ると、抱きしめたときは笑顔を浮かべていたヒトカゲは目を回していました。

私は慌てて地面に降ろしました。

するとヒトカゲは千鳥足でフラフラと近くの木に片手をつき、グッタリしていました。

そんなヒトカゲに

「ヒトカゲ、大丈夫？」

と声をかけると、ヒトカゲは力無くコクリと頷きました。

心なしか尻尾の火も出会った頃より小さくなった気がします。

私たちはヒトカゲが元気になったら出発することにしました。

シゲルは先に行くそうです。

「遅刻だ――――！！！！！！」

何度もお姉さまに起こされたのによつやく起きたこの声の主をから
かってから……

S
i
d
e

o
u
t

第4話 ミハル、初ゲットと兩宿り

Side ミハル

「何で起こしてくれなかったんだよ！」

これが彼がお姉さまに向かって発した第一声でした。

「お姉さまは何度も起こしました！それでも起きなかったのはあなたじゃないですか！」

私が怒鳴るとサトシは少し怯みました。

その隙にお姉さまの手を掴み

「博士それでは行ってまいります」

「う、うむ…気を付けてな」

「い、行ってきます」

私に引つ張られながらお姉さまが博士に挨拶をして研究所を出ます。外に出ると、町内会の人たちとお姉さまのファンクラブの子達が居ました。

お姉さまはファンクラブの存在を知って解散するように言われましたが、解散してルール無用になるとお姉さまの迷惑になる事は目に見えていますしお互いが抜け駆けしないようにけん制の意味も兼ねてお姉さまには解散したといい、裏では残っていたりする非公式ファンクラブなのです。

余談ですが、町の女子の大半（大体7割くらい）が、といっても小さな町です。そんな人数が多い訳ではないですが10代前半、後半がシゲルファンクラブ、10代前半以下はお姉さまのファンクラブに所属していたりします。

ちなみに会長は私です。

そんな訳で、私以外シゲルファンクラブのように着いていくことが出来ないため、皆恨みがましい目で見えます。

着いて来れたとしてもお姉さまが拒否するでしょうが…

私でさえ女の子の一人旅をさせられないと私の両親とお姉さまの両親の両方から頼まれての了解なのですから。

私とお姉さまはファンの子達に囲まれ、応援と恨み言を貰いました。

恨み言は私だけです…でもいいのです。

今日から私はお姉さまとずっと一緒に旅をするのですから、このくらい幸せ税です。

それから私とお姉さまは両親に別れの挨拶をしてマサラタウンを出発しました。

出発するとき、ちょうど研究所から出て来たサトシはピカチュウを連れていました。

マサラタウンを出て、しばらく行くと大きめの川がありオレンジ色の髪をした同じ年ぐらいの女の子が釣りをしていました。

そのすぐ近くにあるこの川沿いでは一番の大きな木を集合ポイントにし、別れてこの辺を散策することになりました。

お姉さまは主にゲットのため、私はゲットとヒトカゲのレベルアップのために

お姉さまと別れて、川沿いに森の中に入り少し進むと何か乾燥した星のような形をしたものがあります。

時折ピクピクと痙攣しているのであればおそらくポケモンであるではなくいるが正しいようです。

図鑑を開くとヒトデマンと表示され解説が流れます。

私は無言で近づきポケットからモンスターボールを取り出しヒトデマンに押し当てました。

ヒトデマンはボールに収まり、何の抵抗もなくゲット出来ました。

水ポケモンなので川に向かって出してみます。

ヒトデマンは川に沈み少しすると

元気になって川から飛び出してきました。

図鑑の情報だとこの辺りでは出ないようなのですがどうしてこんな所にいるのでしょうか？

後で聞いた話だとこの子は誰かが逃がしたポケモンだそうです。

その後も散策を続けていると、何度か虫ポケモンに遭遇しました。

私は、あの事件以来虫ポケモンはどうも苦手で、手持ちにも入れるつもりは無いので虫ポケモンは見つけ次第倒しました。

その後なんとかニドラン とマンキーをゲットできました。

これ以上はヒトカゲとヒトデマンが限界なので、今日の散策はここまでにして集合場所に向かいます。

集合場所に行くと、女の子は居なくなっていました。

しばらく待っていると、雨が降ってきました雷も鳴っていますし移動したほうがいいでしょうか？

それからしばらくしてもお姉さまはやってきません。

私、置いていかれてませんよね？

お姉さまは強制されて私と一緒にいくことになったのでとても不安です。

私が不安げにしていると、お姉さまが森の中から出てきました。

ああ、一瞬でもお姉さまを疑った私をお許してください。

「?.....どうしたんだ?」

「い、いえ、何でもないです」

「そうか?」

「グハッ」

お姉さまのワイシャツが雨に濡れたせいで透けて、い、色っぽ...駄目です、これ以上直視したら理性が持ちません。

「本当に大丈夫か? 顔も赤いし風邪でも引いたんじゃない...」

そう言って私の頭を両手で押さえ、おでこをくっ付ける。

「あう、あう…あう」

お姉さまのお顔がこんな近くに…

「熱は無いみたいだが…ん？どうした？そんな固まって？」

「い、いいい、いえ！ただ大丈夫です！それよりもお姉さまこそそんなびしょ濡れで風邪を引いてしま　います！早く乾かしてください！」

「ん？そうだな、そうさせてもらうか」

そう言ってお姉さまは脱ぎ始め…って

「おおお、お姉さま！こんな所で着替えないでください！誰かに見られたらどうなさるのですか」

「ん？大丈夫だろう？ここには私たち以外誰も居ないし、居ても10歳の下着姿なんて見ても欲情しない　だろう」

「そ、そそそ、そういう問題ではありません！お姉さまはもっと淑

女としての自覚を持ってください！」

「大丈夫だって……」

そ、そそそ、それにお姉さまのそんな姿なんて見たら、私の理性が持つ自身が……チラッ

「て、早っ！」

お姉さまはもう着替え終わっていましたorz。

「どうした？そんな打ちひしがれて」

「お気になさらずに」

「そ、そうか、それはそうと集合時間までだいぶあるが濡れている様子はないし雨が降ってから来たわけでもないしどうしたんだ？」

私がポケモンがこれ以上バトル出来そうになかったので早めに切り上げて来たことを話すと

「手持ちのポケモン全部ボールから出しなさい」

「は、はい」

言われた通りポケモンをボールから出すと、お姉さまは赤とオレンジの間のような色をした霧吹きのようなものを1つ、紫色の色違いの霧吹きのようなものを3つ出して赤いのをヒトデマンに紫のはヒトカゲ、マンキーニドラン に中身が無くなるまで吹きかけていきます。

吹きかけられた子達は元気になりました。

「何ですか？それ」

「紫のが『キズぐすり』、オレンジっぽいのが『いいキズぐすり』だ」

「これが…始めて見ました」

「そうか、ミハルの両親はトレーナーじゃなかったんだっとな。

それなら馴染みがないのは当然か…、ならいくつかやるから持っているといい。

トレーナーの必需品だからな、私と一緒にいるときはいいが今日みたいに別行動のときに困るだろう」

そう言ってお姉さまはバッグからキズぐすりといいキズぐすり10個ずつ、それから『なんでもなおし』というものも同じく10個それと『すごいキズぐすり』というのを5個貰いました。

こんなに貰っていいのかと聞いてみますと

「いくらでもあるから気にしないでいいよ」

「ありがとうございます」

「いいよ……………いくらでも複製できるし」

「お姉さま、何か仰いました？」

「いや、何も」

「そうですか…」

どうやら私の聞き間違いのようですね。

一際大きな雷の音が鳴ると雨が止みました。

近くに落ちたようですが、この辺は草が多いので火災とか大丈夫で

しょうか？

「さて、雨も止んだし出発しようか。」

今から行けば夜にはポケモンセンターに着くだろうし」

「わかりましたわ」

こうして私たちはポケモンセンターに向かって歩き出したのですが、途中に大量のオニスズメが焦げて倒れていました。

もしかしくなくてもさっきの雷、直撃ですか？

お姉さまと私は無言でボールを取り出し投げました。

ヒトデマンのときと同じく何の抵抗も無く捕まりました。

トキワシティに着き、ポケモンセンターに向かうといつの間にか私たちが抜いて到着していたサトシと川で見た女の子が言い争っていました。

というか何です？その真っ黒に焦げた自転車モドキ

S i d e o u t

第5話 ミハル、ロケット団との初戦闘（前書き）

この話では、原作とは異なる点が多数ございます。

- ・ポケモンセンター内部構造
- ・図鑑のオリ機能
- ・時系列の変更
- ・オリ展開

第5話 ミハル、ロケット団との初戦闘

Side ミハル

触らぬ神に祟りなし、あの怒りがこっちに向かないよう気付かない振りして受付に行きます。

ジョーイさんはポケモンの集中治療中らしく不在なので、無人受付にポケモン図鑑を差込、私とお姉さまの宿泊登録をします。

それから公衆電話の所に行き、オーキド博士に電話をします。

「おお、ミハル君にリカ君ようやくトキワシティについたか。

それにしてもリカ君は初日だというのにずいぶんと沢山ゲットしたのう。

元々手持ちが5体じゃから2匹以上捕まえれば転送されてくることはわかっておったから数体は来ると予測しておった。

じゃが、ここまで大量に来ることは予想しておらなかったわ。

しかし、ワシが渡したモンスターボールは5個だったはずじゃが？」

「出発前に両親から餞別として道具を色々貰いましたので…

それと、もう1体そちらに送りたいのですが」

「了解した送りたいポケモンの入ったモンスターボールを転送装置にセットしてくれい」

今の言葉から察すると、オーキド博士が渡したモンスターボールより多く捕まえたって事ですよね？

少なく見積もって6匹以上

「参考までにお聞きしますがお姉さまはどれくらい捕まえたのですか」

「えっと、確かコラッタ・ラッタ・ポッポ・ピジョン・キャタピー・トランセル・バタフリー・

ビードル・コクーン・スピアー・カイロス・ストライク・コダック・ゴルダック・オニスズメ・

ニドラン・ニドリーノ・ニドラン・ニドリーナ・前に偶然手に入れた月の石を戦闘不能になった

ニドリーノとニドリーナに当てて進化したところを捕まえたニドキングとニドクイン・

アーボ・ズバット・マンキー・コイキング・ギャラドス・ナゾノクサ・クサイハナ・マダツボミ・

ウツドン・昔引越してくる前に貰ったリーフの石を使ってニドキングとかと同じ方法で捕まえた

ウツボットとラフレッシュ・コンパン・モルフォン・ヤドン・クラ
ブ・トサキント・アズマオウだから
えゝとの38匹!」

元々持っているのも合わせて43匹ですが、図鑑4分の1以上埋ま
りましたね。

それはそうと、

「さっきも思ったのですが、そんなに沢山の荷物どうやって収納し
ているんですの?」

「それは……………」

「それは?」

「禁則事項です……………ゴメン、滑った」

いいえ、クリティカルです。

「本当は、旅に出るときのためにお小遣いを貯めて買った最新型の
リュックサックなの。」

原理はわからないけど、いくらでも収納できて重さも感じないやつ」

「話をそらし（ましたわ／たのう）」

「うう…」

ああ、涙目で赤くなってるお姉さま可愛らしいですね。

もつと弄りたいですが、やり過ぎて嫌われたくありませんのでここまですておきましょう。

「それはそうと、どうやってこんなに沢山あの時間内に捕まえたんですの？」

「グスツ……ああ、こっちに引越してきてからはあの辺りでよく野生のポケモンを相手にバトルしてたんだ、ある程度強くなったら自分のポケモン同士でバトルしたりしたけど、それでも同じ相手ばかりだと癖とかが出来ちゃうから、時々まああの辺に行ったりしてたんだ。

だからどのポケモンがおおよそどの辺に居るか、私もイーブイたちもわかっているから5匹全員出してどの子がどの辺に居るポケモンを担当するか決め手放ったのよ。

例えば、ゴルダックを捕まえたときはシャワーズがとけるを使ってゴルダックに見つからないように

急所の所まで移動して、バトルのときと違って攻撃が来ると思わず緩んでいるところに急所に向かって 思いっきりアイアンテールを放ったりして、気絶したところを銜えて陸に引きずり上げてきたのをゲツ トしたり、ブースターが少し焦げ目のついたカイロスを銜えてきたのをゲツトしたりとかかな？」

私は飼い猫が蜘蛛を仕留めて主人の下に褒めてオーラを出しながらやって来るがごとく、ブースターが褒めてオーラを出しながら焦げたカイロスの足を銜えて引きずって来る姿を幻視しました。

それから少しばかり談笑して、治療も終わったらしく受付に来るようにアナウンスが流れたので博士に挨拶をして電話を切り、カウンターに向かいます。

「お待たせいたしました、ポケモンをお預かりします」

私たちはモンスターボールをトレーに乗せ、ジョーイさんに渡します。

それから私たちは遅くなった晩御飯を食べに食堂に向かいました。

晩御飯を食べ終わるとちょうどいいタイミングで回復終了のアナウンスが流れました。

受付にボールを取りに行くと、サトシたちはまだそこに居て機械を

つけて眠ったままのピカチュウの看病をしました。

「さっき緊急で治療してたのピカチュウだったのですわね」

「ピカチュウ大丈夫か？」

「リカ！ミハル！何でココに？」

「何でってポケモンの治療とご飯と泊まる以外に何があるんですの」

「それで結局大丈夫なのか？」

「あ、うん、ジョーイさんがしばらく安静にしていれば良くなるって」

「そうか、良かった」

「マサラタウンのリカさん・ミハルさん早くポケモンを引き取りに来てください」

「「あ！…すみません」」

そう言ってボールに手を伸ばしたその時、3つのモンスターボールが天井の窓ガラスを割って落ちてきました。

モンスターボールからはアーボ・ドガス・ラッタが飛び出し、ドガスがえんまくを繰り出した。

「ケホツケホツ、何なんですか？」

「何なんですか？と聞かれたら」

「何なんですかと聞かれたら」

「答えないのが普通だが」

「答えてあげるが世の情け」

「「まあ、特別に答えてやろう」「」

「世界の破壊を防ぐため」

「地球の破壊を防ぐため」

「世界の平和を守るため」

「地球の平和を守るため」

「愛と真実の悪を貫く」

「愛と誠実な悪を貫く」

「ラブリーチャーミーな敵役」

「キュートでお茶目な敵役」

「ムサシ」

「ヤマト」

「コジロウ」

「コサブロウ」

「銀河を駆けるロケット団の2人には」

「宇宙を駆けるロケット団の2人には」

「ホワイトホール白い明日が待ってるぜ」

「ショッキングピンク桃色の明日が待ってるぜ」

「ニャーんてニャー」

「ラッチューノ」

突然現れた4人と一匹、それに従う3匹のポケモンがロケット団を名乗る。

「どっちかに統一しろ、ですわ。」

それ以前にこっち向いて言え、ですわ。

何で味方同士で張り合いながら名乗っているんですの?」

そう、最初はこっちを向いて名乗りを上げていたのです。

ですが、一言名乗りを上げるたびに2人の男女（確かムサシとコジロウ）と3匹ポケモン（ニヤース・アーボ・ドガース）のグループと2人の男女（確かヤマトとコサンジ）と1匹のポケモン（ラッタ）のグループが交互に前に出て名乗りを上げます。

名前を名乗る頃になるとこちらではなくお互いに向き合って睨み合いながら名乗っていました。

「何で味方同士で張り合いながら名乗っているんですの？と聞かれ
たら答え」

「それはもういいですわ」

「そのロケット団つてのが、どうしたってんだ」

「解りの悪い小僧だねえ」

「聞かなきゃ解るはずがない」

「我らの狙いはポケモン」

「オレのピカチュウに手を出すな！」

「ピカチュウ？我らの狙いはそんなしょそこの電気ねずみではない」

「とびつきり底抜けに珍しいポケモンだけだ」

「まって！そんなポケモンこのセンターには居ないわ」

「それを判断するのは我々だ」

「とりあえずこのポケモンセンターを乗っ取って、ここにいるポケモンを全て調べるぞ」

「行きなさいアーボ！」

「ドガース、お前もだ！」

そう言つとドガースが煙幕を出した。

サトシとジョーイさんと女の子はピカチュウの台車を押して、カウンターの反対側の通路に向かい、私とお姉さまはロケット団が背後

にある扉から進入しないように扉の前に立ちます。

煙幕が晴れると、ヤマト・コサンジ・ラッタが残り、残りはサトシたちを追って行ったようです。

まあ、ピカチュウは戦闘不能でもここまで1匹もゲットしていないなんて無いでしょうから、大丈夫でしょう。

ですから今はとりあえず

「ヤマトとコサンジでしたか？すみませんがここから先は一方通行お帰りはあちらです」

そう言って出入り口を指差しますが、帰る気はないようです。

「コサブロウだ！ちゃんと名乗っただろう！」

「どっちでもいいですわ、頑張っ！ヒトデマン」

「シャワーズ！Set up」

「行け！スリープ・ラッタ！」

「スリープ！メガトンパンチ！」

「ラッタはロケットずつき！」

スリープはヒトデマンに、ラッタはシャワーズに向かっていきます。

「ヒトデマン！避けて！」

「シャワーズ、みずのはどう！」

ヒトデマンは回避に成功し、ラッタは避けることも出来ず、弾き飛ばされ戦闘不能になります。

「ヒトデマン、みずでっぽう」

「スリープ、テレポート」

スリープの姿が消え、みずでっぽうは外れました。

そして、スリープがヒトデマンの背後に現れました。

「ヒトデマンっし」

「メガトンパンチ！」

ヒトデマンは直撃を受け吹き飛ぶ。

「ヒトデマン！」

私がそう叫ぶとヒトデマンはなんとか立ち上がった。

「シャワーズ、みぞ」

「お姉さま！！待ってください！」

私がそう叫ぶとお姉さまは攻撃を止めこっちを向きます。

「今がそういう状況じゃないことも、私のわがままなのも解っています。」

ですが、一人でやらせて下さい。

お願いします！」

それを聞いたお姉さまは軽いため息をして

「シャワーズ」

そう一言だけ呟きました。

それを聞いたシャワーズはお姉さまの足元に擦り寄っていききました。

「ありがとうございます！ヒトデマンスピードスター」

「スリープ、テレポートそしてメガトンパンチ」

「ヒトデマン！技を維持したまま仰向けに倒れて！そのままこうそくスピン！」

「なっ！」

ヒトデマンは星の竜巻を巻き起こします。

スリープはメガトンパンチを放つがそこにヒトデマンはなく、星の竜巻に自分から突っ込んだ形となりました。

竜巻に巻き込まれ、スリープは上空に打ち上げられました。

そして、竜巻の回転で目を回したスリープはレポートも受身もとれず床に叩きつけられ戦闘不能になりました。

「オコリザ」

ヤマトがポケモンを出そうとしましたが

「もういいよね？はかいこうせん」

お姉さまがそう言うと言わすシャワーズがはかいこうせんを放ち、ヤマトとコサンジがポケモンセンターの外に吹き飛ばされました。

「やりましたわ」

そう言ってお姉さまに抱きつくも、すぐに剥がされてしまいました。

それとは対象にお姉さまの足にじゃれ付くシャワーズが目に入りました

私はお姉さまに甘えるシャワーズと目が合いました。

その時、ゾクリと寒気がしました。

私にはポケモンの言葉はわかりませんし、目線で会話も出来ません。
でもその時解ってしまったのです。

シャワーズが『いいでしょう』と『羨ましいだろう』と言っている
のを…

羨ましい、私は抱きつく剥がされるといつのに…

「あの、お姉さま、……………いいですか？」

「ん？何？」

「手を握らせてもらってもよろしいですか？」

そう言うシャワーズに睨まれました。

シャワーズって確かにらみつける覚えませんか？

お姉さまは無言で手を出してくれました。

「ありがとうございます」

私たちは手を繋いだまま、サトシたちが向かった方の通路に走っていきました。

走っているとドアの壊れた部屋が見えてきたのでそこに入りました。

その部屋にはジョーイさんと女の子がボールを機械に入れていました。

「サトシ、どうしました？」

「彼ならピカチュウを連れて向こうに行ったわよ」

その時、大きな爆発音がしました。

私たちは慌てて行くとサトシと元気になったピカチュウが居ました。

無事なのはいいですがポケモンセンターがほぼ壊滅状態です。

幸いにも、宿泊施設と簡易回復装置が無事で良かったです。

でも一言言ってもいいですか？

これの弁償、誰の支払いになるのですか？

夜明けまであまり時間がありませんが、私とお姉さまは泊まることにしました。

サトシと女の子はもう出発するそうです。

そういえば、女の子の名前聞いて無かったですね。

ベッドに入るとすぐに睡魔が襲ってきました。

なんだかんだいって疲れは溜まっているようです。

初めてのポケモン、初めてのバトル、初めての旅、初めてのゲット

色々あった私の旅の1日目は終わりを迎えました。

S i d e o u t

第6話 リカ&ミハル、初めてのジム戦とサカキの思惑

Side ミハル

私たちが起きるともう昼過ぎでした。

寝た時間が寝た時間なので仕方ないのですが…

私とお姉さまはポケモンセンターを発ちトキワジムに向かいました。

「って、何で私までジム戦なんですの!？」

「何でってせっかくやってるんだし…ポケモンリーグ目指しているんでしょ」

「確かに目指していますけど、そうではなくて、無理ですよ、トキワシテイのジムはカントー最強なのですよ!？」

今の私じゃ相手にもならないですよ!？」

「ジムの前で誰か騒いでいると思えば、ずいぶん可愛らしいお客様のような」

「ふへ？」

「私はトキワジムのジムリーダーを勤めているサカキという。

我がトキワジムに来たという事はジム戦に着たのかね？」

「いえ、その…」

「そうです。2人とも受けられますか？」

「ですから無理ですって！私たちバッチ1つも持っていないんですよ！？」

「クツクツク、そんなことなら気にしなくてもいい。

そもそもトレーナーは現在地から一番近い所にあるジムを回っていくのだ。

グレン島に住むトレーナーは1つ目のジムで挫折してしまうであろう？

だからどのジムでも持っているバッチの数と旅の期間でジムリーダーは実力に上限を決めているのだ。

それは技術だったり使用ポケモンだったりいろいろとな。

ちなみにここトキワジムでは使用ポケモンに制限がかけられている。

ここが最強などといわれているのはただ単に私は会社を経営しておりあまりジムに滞在していないためほとんどのトレーナーはここを後回しにするのだ。

そのためここに挑みに来る頃にはバッチも7個以上がほとんどで旅の期間もそれなりに長い。

だから私の使用ポケモンの上限も上がり、最強のジムといわれるようになったのだ。

だから気にせず挑戦してきたまえ」

「バッチはともかく旅の日数はどうやって知るんですか？自己宣告？」

「いや、ポケモン図鑑を使う。」

「ポケモン図鑑ですか？」

「ポケモン図鑑は身分証としても使われる。」

それは何も名前と出身地だけがわかるだけではない。

先にも言った旅の日数の他にバッチの数・勝率・戦術・手持ちのポケモンの履歴・Ｔポイントなど様々なことが解る。

それにジム戦は公式戦だバトルの前にポケモン１匹ずつ技を４つ登録しなければならない。

登録してある技以外の技を使つたかどうかの判断も行われる。」

「Ｔポイント？」

「Ｔポイントとはトレーナーポイントの略でバトルをすることに加算される。

ポイントは勝ったほうが多くもらえるが、負けても減らされることは無い。

このポイントはポケモンセンターをはじめ、全国のＴポイント対応店で現金の代わりとしても使用できる。」

「「へ」」

「だいたい話がそれだな、それでバトルはするのかね？」

「「やります！」「」

私たちはジムに入り技の登録とエントリーをします。

といっても私は技の選択をやるのはヒトデマンだけなのですが…

お姉さまは技の登録が大変そうです。

先にバトルをするのはエントリーを先に済ました私のようにです。

うゝ、緊張してきました。

「これより！ジムリーダーサカキ対チャレンジャーマサラタウンのミハルのジム戦を開始します。」

使用ポケモンは3体の総入れ替え戦です。

先攻はチャレンジャーから！試合！開始！」

「頑張つて！ヒトカゲ」

「出て来い！イシツブテ」

「イシツブテ？ここは岩タイプのジムなの？」

「いや、ここは地面タイプのジムだ。

先攻は君だ」

「ヒトカゲ、メタルクロー」

効果は抜群、効いているみたいですね。

「イシツブテ、たいあたり」

「ヒトカゲ、避けて！もう一度メタルクロー」

二回目のメタルクローがあたりイシツブテは戦闘不能になりました。

「イシツブテ、戦闘不能ヒトカゲの勝ち」

「やりましたわ」

まずは1勝ですね。

「ヒトカゲ、戻りなさい。」

よくやりましたわ。

頑張つてオニスズメ」

地面タイプなら飛行タイプが有利

「出番だ、デイグダ」

「オニスズメ、つつく攻撃」

「デイグダ、あなをほる」

オニスズメが急降下してつつくをしようとしたがその前にデイグダが地面にもぐつてかわされてしまいました。

そして上空に飛び上がったオニスズメをデイグダは地面から飛び出して吹き飛ばしました。

「オニスズメ！」

「デイグダ、ひっかくで追撃」

オニスズメは吹き飛ばされて戦闘不能になった。

「オニスズメ、戦闘不能ディグダの勝利」

「オニスズメ、お疲れ様」

私はオニスズメをボールに戻した。

「頑張つて、ヒトデマン」

「行ってこい、サンド」

「ヒトデマン、みずでっぽう」

サンドは回避が間に合わず直撃した。

サンドはそれだけで戦闘不能になった。

「サ、サンド戦闘不能ヒトデマンの勝利、よって2対1で勝者マサラタウンのミハル」

「おめでとう、これがグリーンバッチだ。

それにしてもそのヒトデマンレベルが飛びぬけているな。

どこで手に入れたんだい？」

「この子は昨日死に掛けていたのを拾ったのですわ。

お姉さまが言うにはこの子が居た周辺にヒトデマンは生息しないからだれかトレーナーが捨てたのではないかと事です。」

「なるほど、酷い事をするトレーナーもいたものだ。

まあ、何にしてもおめでとう」

「ありがとうございます」

S i d e o u t

S i d e リカ

ミハルの試合が終わって、次は私の番だ。

「よろしくお願いします」

「これより！ジムリーダーサカキ対チャレンジャーマサラタウンの
リカのジム戦を開始します。

使用ポケモンは3体の総入れ替え戦です。

先攻はチャレンジャーから！試合！開始！」

「リーフィア！Set up」

「行け、サンド」

「リーフィア、タネマシンガン」

リーフィアはサンドを一撃で戦闘不能にした。

「サンド戦闘不能リーフィアの勝利」

「そのリーフィアもよく育てられている。

その子も拾ったのかね？」

「いえ、この子はタマゴから育てたんです」

「ほう、しかし次はどうかな？」

「シャワーズ！Set up」

「行け、カラカラ」

「さっきと使用ポケモンが違う」

「カラカラ、ホネブーメラン」

「シャワーズ、かげぶんしん」

シャワーズのかげぶんしんでホネブーメランは外れる。

「シャワーズみずでっぽう」

「カラカラ戦闘不能リーフィアの勝利！よって2勝先制したため勝者マサラタウンのりカ」

「おめでとう、これがグリーンバッチだ」

「ありがとうございます」

「君たちはポケモンリーグセキエイ大会を目指すのだろうか？」

「はい」

「開催されるセキエイ高原に行くにはこのトキワシティを通ることになる。」

ならバッチを集め終わりセキエイ高原に行く前にここに来なさい。

ジム戦用ではなく、私個人のポケモンでウォーミングアップをや
つていくといい」

「ありがとうございます。」

その時はよろしく願いします」

その後私たちはジムリーダーのサカキさんに見送られ、トキワの森
……ではなく、ポケモンセンターに向かった。

S i d e o u t

S i d e サカキ

2人を見送り、ジムに戻った私は笑いを堪える事が出来なかった。

今日はなんて良い日だろう。

今日私はジム戦などやるつもりはなかった。

その私が2人をジムに招き入れた目的は、リカという少女が持つ五
つ子のイーブイを見るためだ。

5つタマゴを産んでの五つ子は普通だが、1つのタマゴから5匹生
まれるのは異常だ。

それだけでも興味深いが、我等ロケット団にとっては違う意味も持
っている。

あのイーブイたちの片親は、昔我がロケット団がミュウの遺伝子からミュウツーを生み出すために様々なポケモンにミュウの遺伝子を移植したが拒絶反応を出さず、奇形にもならなかった数少ない例の1体だ。

その後イーブイはピカチュウを連れて研究所を脱走した。

そしてピカチュウは行方知れずとなり、イーブイはタマムシに住むイーブイ使いの夫婦に拾われた。

あの夫婦から取り返すために労力を消費するより、イーブイが成功すると解ったのだからまたやったほうが建設的だ。

それでも監視は続けられた。

そして7年前、夫婦の娘があイーブイのタマゴを貰った。

そのタマゴから産まれたイーブイは先の理由のため世間から注目を浴びる事となり、監視もし辛くなった。

それでもミュウの遺伝子がどのように影響しているか知るため監視を続ける事となった。

そんなある日の事、その娘はタマムシジムによく預けられており、そこでジムのポケモンとバトルをいる。

それはいつもの事だが、監視をしていた団員は気になる事を発見した。

『生まれたてのイーブイはあそこまで強いだろうか？』

イーブイのバトルの映像を解析したところ普通のイーブイより強いことがわかった。

それから他の成功体の子孫も同じになるか調べたところ成功体の子供はレベル以上の実力を出せ、成長が早い事がわかった。

そのポケモンたちの事を『強化ポケモン』と名づけられ、ミュウツ―と並行して研究される事となった。

イーブイの奪取も会議に出たが、下っ端団員が本気のジムリーダーやあの夫婦を相手にして成功する確率など0に等しい。

だからといって幹部クラスが出て万が一があつては困るため監視の継続ということで落ち着いた。

それもイーブイがリーフィアに進化したことでさらに難しくなり、彼女たちがタマムシから引越したときには監視すら断念された。

その少女が自分のジムの前に来たのだ。

会議で何度も話題に上がっているため、面影を残したその容姿、そしてその年では珍しい純白の髪これだけ特徴が一致しているのだから、おそらく本人だろう。

本人かどうか名前の確認とイーブイたちがどこまで成長したか調べるのにジム戦はもってこいだ。

もう1人の少女はジム戦を済っており、一緒に旅しているようなので彼女が完全に拒めば、あの少女もジム戦をせずに行ってしまうで

あろうことは容易に想像できた。

だから私は、丁寧に対応した。

もつとも言った事は本当だがな。

2人をジムに連れ込み、ジム戦エントリーをさせた。

登録内容を見て、あの少女がリカ本人であることを再確認する。

それから、ミハルと名乗る、どうでもいいと思っ^ていた少女とバトルを行った。

だがここで良い意味で誤算があつた。

ミハルと名乗った少女が出したヒトデマンに見覚えがあつた。

強化ポケモンの研究の際、性別のないポケモンも研究された。

子供を産めないため遺伝子を採取してクローニングしたところ、能力は上がったが凶暴性が増し、言うことをまったく聞かないのだ。

ミュウツーすら押さえ込んだ制御装置を取り付けても効果はなかった。

そのため、トキワの森やトキワ・マサラ間にある森に捨てたのだがまたこうして目の前に現れるとは思ひもなかった。

それも、ちゃんとトレーナーの言うことを聞いているのだ。

もつとも、トレーナーが未熟で本来の力が出せていないようではあるが

このトレーナーの能力なのか、何らかの条件を満たすと凶暴性をなくすのか…

『魔は魔を呼ぶ』という、もし前者なら彼女をロケット団に引き込むのもいいかもしれない。

今は旅の途中、監視も付けやすいだろう。

ミハルとのバトルも終わって次は元々の本命リカとのバトルだ。

ジム戦では前のバトルで使用したポケモンの出す順番を変えることや使用ポケモンを変えることが認められている。

これは連戦や再戦のために作られたルールだ。

彼女はリーフィアを繰り出した。

同じポケモンを使っている似た容姿の同姓同名の可能性もある。

なのでさっきより強いレベル20バッチ2つクラスのサンドを出した。

彼女なら楽勝、別人なら苦戦するだろう。

もし人違いだったのなら持ってくるモンスターボールを間違えたと謝罪すればいい。

結果、彼女はサンドを瞬殺した。

この強さなら同一人物だろう。

独特の指示の出し方も同じなのだし。

次に彼女が出したのはシャワーズ、パーティに同じポケモンを重複させるトレーナーは少ない。

ならこのシャワーズはリーフィアに進化少し後に進化させたシャワーズだろう。

彼女であると確証を得られた以上このシャワーズも相当強いはずだ。

なので私はカラカラを出した。

種族こそはバッチは0〜3個クラスのジム戦で使用するものだが、レベルはバッチ4個クラスの強化ポケモンでバッチ7個クラスの強さを持っているのだ。

この勝負、カラカラに勝っても負けてもどちらでも良い。

カラカラに勝てばそれでよし、仮に負けてもある程度善戦できれば出すポケモンを間違えたと言って『ジムリーダーが認めればバトルに勝利しなくともバッチを渡すことを許可する』という協会のルールの下、バッチを渡せばいいのだから。

結果からいうと、勝負はシャワーズの勝ちだった。

バッチ8個以上クラスでもあそこまでの圧勝は出来ない、おそらく

ジムリーダーの本気クラスはあるだろう。

バッチを渡し、再戦の約束をしてジムから出て行くのを見送った。

旅をして強くなれ、そして仲間を作れリカとミハルよ。

お前たちの持つ魔が、別の魔を持つ人間を引き付けるかもしれない。

お前たちのポケモンが持つ『ミュウの遺伝子』という魔がミュウを初め他の伝説を引き付けるかもしれない。

それらを引きつれ再び挑みに来い。

私はミュウツーをもって迎え撃とう。

そして叩き潰し、我がロケット団の軍門に下してくれる。

すべては我がロケット団の未来のために…

私はジムに戻り、少し笑いをこぼしながらジム内部にあるロケット団基地に入る。

秘書がやってきて言う労いの言葉を聴き、指示を出す。

「今出て行った2人を監視するように指示を出せ」

「しかし、今居る団員は重要な案件を抱えている者ばかり、長期任務は今後に支障をきたすため無理かと」

「あいつらが居ただろう？」

技術研究部門に所属していれば今頃エリート団員になれていたのに何故か現場勤務をしているバカどもが」

「ムサシ・コジロウ・ニヤース・ヤマト・コサンジですか？」

「そうだ、そのムサシ・コジロウ・ニヤースにやらせろ」

「ムサシ・コジロウ・ニヤースの3名は珍しいポケモンを見つけたので捕まえるまで帰らないと言って昨日から音信普通ですが」

このとき私は知らなかった。

ムサシ・コジロウ・ニヤースが追っていったポケモンが、あの日イブイと共に脱走したピカチュウの子供であるとは…

「ならばヤマト・コサブロウにしろ」

「ヤマト・コサンジはムサシとコジロウに負けない珍しいポケモンを手に入れてくると言って出て行きましたが」

「チツ使えんやつらだ……………ん？コサンジではなくコサブロウではなかったか？」

「いえ、コサンジと記憶していますが」

「そうか…コサブロウではなくコサンジだったか…」

S i d e o u t

第7話 ミハル、サムライ少年と新たな同行者（前書き）

アニメ4話のサムライって確かこんな感じでしたよね？

第7話 ミハル、サムライ少年と新たな同行者

Side ミハル

ジム戦後、トキワシティのポケモンセンターにまた一晚泊まり、明け方トキワの森に向かって出発しました。

トキワの森は虫ポケモンが多く生息していることで有名で、虫が苦手な私の懇願でココでは別れてすぐに突っ切ることになりました。

お姉さまの腕にしがみ付いたまま歩ける事に役得だと思ったのは内緒ですわ。

少し進むと虫取り網を背負い鎧兜を着込んだ短パンの男の子が出てきました。

奇抜すぎて普通に引きますわ。

「お前たちマサラタウンから来たトレーナーでござるか？」

「そ、そうですね」

お姉さまもコクンと頷く。

「拙者の名はサムライと申す。

現在、マサラタウン出身のトレーナーに3戦0勝2敗1引き分け中のトレーナーでござる。

よってお二方にもポケモンバトルを挑ませていただくでござる」

こうして私とお姉さまは変体とポケモンバトルサムライをすることになりました。

先に勝負するのは、お姉さまです。

「行くでござる、カイロス」

「ブースター！Set up」

「カイロス！はさむ攻撃い」

「ブースター、ひのこ」

ブースターは接近してきたカイロスを引き付けてひのこで一撃でした。

「カイロス！拙者の負けでござる。」

次は負けないでござる。」

次は私の番ですわ。

「頑張つて！ヒトカゲ」

「行くでござる、トランセル」

虫と男、私にとって最悪の組み合わせですわ。

それはそれとして

「かたくなるしか使えないトランセルで勝つ気があるんですの！？」

「何を言うか！昨日戦ったマサラタウン出身のサトシという少年はトランセルで拙者のカイロスを破ったでござるよ！」

「ちなみにどうやって？」

「拙者のカイロスが彼のトランセルをはさむでまっぷっ…って敵

に教える分けないでござるよ」

「まあ、いいですわ。」

私は早くこの森を抜きたいので」

「それならはじめるでござる！トランセルかたくなるでござる」

「ヒトカゲ、ひのこ」

トランセルは焦げ目を付けて戦闘不能になりました。

「え、遠距離攻撃は卑怯でござる！男なら！侍なら！接近戦のガチンコ勝負でござる！」

「私は男でも侍でもありませんわ！っていうか何で私にだけ言うんですの！？」

「拙者の負けでござる。」

拙者はココでマサラタウン出身のトレーナーを待つとするでござる」

「無視するなですわ！っとお姉さまも置いていかないでくださいですわ！？」

私がツツコミを入れている間にお姉さまは先に行こうとしていましたわ。

私がお姉さまを追いかけてようとしたその時、お姉さまの近くの茂みから小さな女の子とポケモンが飛び出してきました。

S i d e o u t

S i d e ? ? ? ?

今日で私ももう8歳。

お父さんとお母さんが死んでもう3年になる。

2人はてんがいこどく？とかいう者らしく、私は誰にも引き取られることなくこの山小屋で暮らしている。

この山小屋は両親が別荘として所有していたもので、元々住んでいた家は両親が死んだ時、両親の友達を名乗るコイキング売りをしている男が現れてお葬式を変わりにやってくれた。

そのお葬式の費用を作るためだと言って家と土地を売ることとなった。

お葬式はちゃんと行われましたが、遺産のほとんどを手数料とかで持っていかれてしまいました。

今思えば私は騙されたのでしょーうね。

今の私にあるのはこの小さな山小屋と2匹のポケモン、ピカチュウとドードーだけ。

遺産も底を尽きてからは川で釣った魚を食べて生活をしている。

今日もお昼の魚を取ろうと釣竿をもって川へ向かっている途中、見知った鎧兜を見た。

おそらくまたマサラタウンのトレーナーに絡んでいるのだろう。

私は茂みからこっそりとバトルを覗いた。

ちょうどブースターがカイロスを倒したところだ。

この辺りでブースターなんて珍しい。

彼が戦っているならマサラ出身のトレーナーなのに。

最初のポケモン居なかったのかな？

たまに見かけるんだよね。

ポケモンを選ぶのが4番目以降のトレーナー、大抵ピカチュウかイーブイを貰う。

貰ってすぐ進化させたのかな？進化条件石だし…

次の女の子はヒトカゲを出し、彼はトランセルを出した。

女の子も突っ込んでいるけどトランセルってバトルに勝つ気あるのだろうか？

あ、負けた。

勝負はあっさりついた。

彼女たちも行くみたいだし、私も釣りをしに行こう。

そう思い振り向くと何かにぶつかって尻餅をついた。

そこには、ポリゴンが居ました。

何でこんなところに居るのか解りませんが、何やら敵意を向けてきています。

ポリゴンはいきなりサイケこうせんを私に向かって放ってきました。

突然の攻撃に対応できず私は吹き飛ばされ地面に打ち付けられます。

私は応戦しようとボールを手に取りますが開閉スイッチが壊れてしまい、ポケモンが出せなくなっていました。

ポリゴンはサイケこうせんを再び放ちますが、当たる前に体が持ち上がり攻撃が外れます。

私はお姉さまと呼ばれた人に抱えられていました。

その人は腰にあるホルダーからボールを取りサンダースを出します。

さっき見たのはブースターだったと思うのですが…

「サンダース、にどげり」

サンダースはポリゴンににどげりを放ち、ポリゴンは戦闘不能になりました。

「助けていただきありがとうございます」

「怪我はない？」

そう言って私を地面に下ろします。

「はい、私は大丈夫なんですがボールが…」

そう言ってヒビの入ったモンスターボールを見せます。

その人はボールを手にとって見ます。

「これはポケモンセンターで直してもらわないと駄目ね」

「そうですか……あ、お礼がしたいので家に来てください。

申し遅れました、私の名前はイヴと申します」

「私はリカ、こっちはミハルとサムラ……あれ？サムライは？」

「侍ならとっくに行ってしまいましたわ」

「そうなの」

「彼とは面識がありますので大丈夫です……どうぞこちらに」

そう言って私は彼女たちを案内する。

家に着き、2人に座って貰うとコップに水を入れて出す。

「すみません、水しかなくて」

「どうぞお構いなく」

「改めまして、先ほどは助けにいただきありがとうございます」

「怪我が無くて良かったよ。」

「ところでこの辺ってポリゴンが出るの？」

「出ません、というか最近のトキワの森は変なんです。」

「私はこの森に住んでもうすぐ3年になりますが、この1ヶ月森に居ないポケモンが出るんです。」

「メタモンやコイル、なかにはダンバルのようなカントーに居ないポケモンまで…共通点は凶暴でいきなり人に襲い掛かって来ることです」

「いくら手持ちポケモンが居るとはいえ、何でそんな危ない森で1人で出ていたの？」

「えっと、夜ご飯の魚を取りに」

「い」両親はどうしたの？」

「両親は3年前に亡くなりました。

親戚も居ません」

「ごめんなさい」

「いえ、大丈夫です」

「それなら、一緒に来る？」

トキワとニビならニビのポケモンセンターが近いから、ボールの修理でニビシティに行くでしょう？

ポケモンセンターで保護児童登録をすれば10歳未満でも旅に出れるし、国の補償も受けられるんだし…まあ私たちと一緒に行動しなくちゃいけないけれど」

「良いんですか？」

「私が言い出したんだしいいわよ」

「私も構いませんわ。」

お姉さまと2人旅でなくなるのは残念ですが、この子をこんな危険なところに置いておくよりよっぽどいいですわ」

「えと、ありがとうございます?」

それから私は旅支度をする。

持ち物は両親の写真とポケモン、下着にタオルに洗面具にお財布つと、それをリュックにつめる。

寝袋は町で買えるかな?あと衣服は…といっても食費の為に小さくなった古着は売って、そのお金で新しい服を古着店で買っているの
で1番綺麗な服もさっきのサイケこうせんで少しボロボロになってしまった。

町に行ったら古着屋に行こう。

古着をつめていると、2人に聞かれたのでそのまま答えると、何故か起こられ買ってくれるそうです。

何というか色々してもらって申し訳なく思います。

盗られる物はありませんが、しっかりと戸締りをします。

最後に鍵をかけて

「お父さん、お母さん、行ってきます」

S
i
d
e

o
u
t

第8話 イヴ、お姉ちゃんが来ました。

Side イヴ

トキワの森を抜け、真っ先にポケモンセンターに向かった。

そのジョーイさんが、トキワシティのジョーイさんとそっくりということで一騒動あったのは置いて、2人のモンスターボールと一緒に私のボールを見てもらう。

診断の結果、明日の朝には直るそうです。

ボールを預け、リカさんのご両親に電話をします。

そこで私のことを紹介され、今までの経緯を話すと養子に來ないかと言われました。

正直戸惑いました。

一人ぼっちでの生活はもう嫌ですが、両親以外の人を親と呼ぶのも抵抗があります。

私はその事を正直に話すと、今結論を出さなくて良いと、養子にならなくても良いし、なったとしても『おじさん・おばさん』と呼んでもいいから、とりあえず旅をしながら考えてみるようにと言われました。

その後色々あって、最終的に養子になるかは考えることになり、何

故かりカさんをリカお姉ちゃんと呼びミハルさんをミハルお姉ちゃんと呼ぶことになりました。

その後オーキド博士に連絡を取りトキワの森の調査が行われることとなりました。

電話を終えると2人はボールを受け取り、それから私たちはニビジムに行きます。

明日行うジム戦の予約登録を行うためです。

登録をしているとバトルフィールドのほうから

「ピカチュウ！天井に向かって10まんボルト！」

という声がした後、火災警報器が鳴りました。

火災場所はバトルフィールドのようですが、先ほどの電撃がスプリンクラーに当たったのでしょうか？

施設の破壊って良いんですか？

職員の人もぜんぜん慌ててないので大丈夫なのでしょう。

ジムを後にして次に向かったのは洋品店です。

古着ばかり着ていた私は最近の服を知らないので2人に任せました。

それから数時間私は2人の着せ替え人形のように色々な服を着せられ、最終的には黒のワイシャツにワインレッドのネクタイとネクタイと同じ色のミニスカートを着ることになりました。

その後はポケモンセンターで旅に必要な寝袋や今使っている子供リュックではなくちゃんとした旅用のリュックを買ってもらった。

ちなみにお金はおばさんが転送してくれたらしいのでいつかお金を貯めて返したいと思います。

やる事が終わるとそれぞれ別行動です。

ミハルお姉ちゃんはおつきみ山方面でジム戦に向けてレベル上げ、リカお姉ちゃんはトキワの森の入り口近くの散策と捕獲に向かいます。

私はリカお姉ちゃんについていく事にしました。

トキワの森付近に行くとリカお姉ちゃんはモンスターボールを取り出し、シャワーズ・ブースター・サンダース・リーフィア・イーブイを出しました。

イーブイたちは何をするかわかっている様に森に入っていきます。

ていうか何でこんなにブイ系で揃えているんですか!?

聞いてみるとリカお姉ちゃんはタマシの生まれで、あの子達は3歳の誕生日に貰ったタマゴから産まれた五つ子なんだそうです。

3歳って……私のドードーも5歳の誕生日に両親から貰った最後

の誕生日プレゼントなんですけどそれでも持つのが早いつて言われたんですけど……

ちなみにピカチュウはトキワの森で傷ついて倒れているところを助けたんです。

そんな話をしているとイーブイたちが帰ってきました……ポケモンを銜えて。

何でも凶暴化の調査のサンプルとしてオーキド研究所に送るのだそうです。

研究の結果によつてはトキワの森を立ち入り禁止になるかもしれないそうです。

あそこには私しか住んでいませんし、サムライって彼も山小屋を持っているようですがそこに住んでいるのではなく、ただの休憩所のようにですし。

私は家が有るから禁止になつてほしくないですが、ここ最近怪我人も少なくないですし対処してもらつたほうがいいのじゃないか、少なくとも1年は帰らないのですし。

考え事をしているうちに他の子達も帰ってきました…ポケモンを銜えて。

連れてこられたポケモンはピカチュウが2匹・コイル・レアコイル・メタモン・ポリゴン・ダンバルの7匹

リカお姉ちゃんのかみなりの石を出して気絶したピカチュウに当て、

ライチュウに進化させます。

7匹をボールに入れるとライチュウ以外が転位されました。

リカお姉ちゃんはいーブイが少し傷ついているのを見つけキズぐすりを取り出しますが私が待ったをかけます。

「このぐらいの怪我だったら」

そう言つて、私はイーブイの傷口に手をかざします。

イーブイのキズが薄く発光して傷が治ります。

私が笑顔で振り向くと、リカお姉ちゃんが驚いた顔をしていました。

リカお姉ちゃんは真剣な表情でこの力を人前なるべく使わないように、使ってもばれない様に使うように言います。

リカお姉ちゃんは気にしないようですが、世界中にはこういう特別な力を気味悪がる人も多くいるそうです。

リカお姉ちゃんも特殊な力を持っていて、タマムシに居た頃怖がられたことがあるそうです。

私はリカお姉ちゃんとなるべく使わないように約束します。

ミハルお姉ちゃんは知っているのか聞くと、知られたときに避けられるかもしれない恐怖で言えないそうです。

その後、ポケモンセンターに帰り、リカお姉ちゃんはライチュウを転送してオーキド博士に連絡を取ると、先ほど転送されたポケモンが暴れて大変だそうです。

これは、閉鎖したほうが良いかもしれないですね。

ただでさえ凶暴化したポケモンを前に自分のポケモンを見捨てて逃げるトレーナーもたまに居るのに、何かの間違いで凶暴化したポケモンを捕まえてしまい、手に負えず街中で逃がすなどされたら目も当てられません。

通信を終え、私たちはポケモンセンターの前でミハルお姉ちゃんの帰りを待ちます。

その後2時間ぐらいで帰ってきたミハルお姉ちゃんとジョーイさんにモンスターボールを預け、ポケモンセンターのレストランで夜ご飯を食べます。

まともなご飯なんて何ヶ月ぶりでしょう。

しかもタダ!!

夜ご飯を食べ終わり与えられた部屋に行きます。

部屋で今日買ってもらったパジャマを着て横になります。

こんなふかふかのベッドで寝るのも久しぶりです。

私はこんな幸せを味わっているのでしょうか？

ベッドで横になっていると両親の生きていた頃を思い出します。

3年たった今でも覚えています。

こんなふかふかのベッドでお母さんに抱かれながら寝たあの日のことを……

2人はもう寝てしまったようで、私は2人を起こさないようにベッドから起き上がります。

「眠れないの？」

不意に聞こえた声に心臓が飛び上がりそうになります。

「起こしちゃいましたか？」

「起きてただけだから大丈夫」

「そうですか」

「それで、眠れないの？」

「はい、昔のことを思い出してしまつて」

「おいで」

私はミハルお姉ちゃんを起こさないように静かにリカお姉ちゃんの元に向かいます。

リカお姉ちゃんは掛け布団をまくり

「一緒に寝ましょう」

と言ってくれました。

私がベッドに入ると優しく抱きしめ頭を撫でてくれました。

自然に零れる私の涙を何も言わずに受け止めてくれました。

そのまま私は眠つてしまい、気が付いたら朝になっていました。

天国のお父さん・お母さん、私は今幸せです。

S i d e
o u t

第9話 ミハル、2つ目のパッチとフシギダネ

S i d e ミハル

私は朝目が覚めると、ベッドを出てお姉さまの眠るベッドに向かいます。

理由はもちろんベッドに忍び込むためです。

息を潜めベッドに近づくと、イヴちゃんに先を越されていました。

私も！と入ろうとしてイヴちゃんの顔に涙の後があり、お姉さまのパジャマが濡れているのがわかりました。

イヴちゃんの生い立ちを考えれば、人の温もりに久しぶりに触れて緊張の糸が緩んだのでしょうか。

私は軽いため息を吐き

「まったく、今日は特別ですわよ」

そう言って二人の布団を掛け直します。

やることもなくなり暇になってしまった私は何をしようか考え、と
りあえず着替えることにします。

それから部屋を出て外をぶらつきながら今日のジム戦について考えます。

ニビジム、岩タイプを中心にするジムで試合は2対2の勝ち抜き戦
私のメンバーはヒトデマンは決まりとしてもう1体を何にするか

相性で考えてマンキー、でも昨日進化したりザードとニドリーナも
実戦で使ってみたいですし。

迷いますわ、リザードとニドリーナもいわタイプと相性のいい技を
覚えていますわ、リザードはいわとじめんニドリーナはじめんの技
を使われたら効果抜群ですし………考えても埒が明きませんわ。

とりあえずお姉さまたちを起こして朝ご飯を食べてしましましょう。
お腹がいっぱいになったら何か思いつくかもしれませんし

私が部屋に着くと二人はもう起きていて着替えも終わっていました。
私たちは朝食を取り、受付でジョーイさんからイヴちゃんのモンスターボールを受け取ります。

新品同然になって帰ってきたモンスターボールにイヴちゃんはとても喜んでいます。

その後、イヴちゃんのポケモンを見せてもらおう事になりポケモンセンターの裏に行きます。

イヴちゃんのポケモンはドードーとピカチュウ。

イヴちゃんはバトルが苦手であまりやらないそうなのでレベルはそこまで高くないそうです。

イヴちゃんはコンテスト向きかもしれませんね。

そろそろジム戦の時間になるためジムに向かいます。

「よく来たな！私がジムリーダー代理のムノーだ！」

「ジムリーダー代理？本物のジムリーダーはどうしたんですの？」

「ジムリーダーの我が息子タケシは世界一のポケモンブリーダーになるべく、昨日サトシくんと共に旅に出たため留守だ！」

「旅立ったということはサトシはバッチは手に入れられたのか」

「それでどちらからジム戦をするんだい？」

「私から行かせていただきますわ」

「昨日聞いてわかっていると思うがもう一度確認をしようバトル形式は2対2の勝ち抜き戦だ」

「わかってますわ」

「それではジムリーダー代理ムノー対チャレンジャーマサラタウンのミハルのジム戦を開始します。

先攻はチャレンジャーから！試合！開始！」

「頑張つて！マンキー」

そう、私はマンキーに決めました。

「いけ！オムナイト」

オ、オムナイト！？危なかったですわ、もしリザードを出していたら確実にやられていましたわ。

「マンキー、からてチョップ」

「オムナイト！みずでっぽう」

「避けて！攻撃続行ですわ！」

「オムナイト！からにこもる」

からにこもったオムナイトを攻撃してマンキーは痛そうにしている。

「マンキー、ちきゅうなげ」

マンキーはオムナイトの殻を両手で持ってジャンプし、空中で1回転をしてフィールドにたたきつけました。

土煙が晴れると、オムナイトは殻から出て目を回していた。

「オムナイト、戦闘不能マンキーの勝ち」

「なかなかやるな！次はどうかな？」

いけ！サイホーン

つのでつく攻撃！」

サイホーンはマンキーに向かって突っ込んできました。

「マンキー、ジャンプしてからてチョップ」

マンキーは指示通り、ジャンプをしてサイホーンの頭上を取り、からてチョップを叩き込み戦闘不能にしました。

「サイホーン戦闘不能マンキーの勝利！よって勝者マサラタウンのミハル」

「おめでとう！これがニビジム公認トレーナーに渡されるグレーバツチだ」

「ありがとうございますですわ」

「それで次はリカ君だったかな」

「よろしくお願いします」

「それではジムリーダー代理ムノー対チャレンジャーマサラタウンのリカのジム戦を開始します。

先攻はチャレンジャーから！試合！開始！」

「シャワーズ！S e t u p」

「いけ！ゴローン」

バッチ2つ目でもう進化形が出るんですの！？

私は運がよかったのでしょうか。

お姉さまは大丈夫でしょうか？

「シャワーズ、みずはどう」

シャワーズの前に水の球体が出来上がり、打ち出されます。

「ゴローン、戦闘不能シャワーズの勝利」

「ならば次だ！いけ！カブト」

「シャワーズ、戻って！お疲れ様…リーフィア！S e t u p」

お姉さまはシャワーズを引っ込め、リーフィアを出しました。

勝ち抜き戦では引っ込めてしまったポケモンを再び使用出来ません。出来るのは交代を認めた変則ルールのみ、相性が良いとはいえリーフィアが負ければお姉さまの負け。

お姉さまは出す順番を間違えてしまったようです。

「マジカルリーフ」

お姉さまがそう言うと、リーフィアの周りに多くの葉っぱが出現します。

その葉っぱは、カブトの周りを囲み逃げ場を封じて襲い掛かります。

「カブト戦闘不能リーフィアの勝利！よって勝者マサラタウンの力」

「おめでとう！これがグレーバッチだ！」

「ありがとうございます」

お姉さまはそう言ってバッチを受け取ります。

私たちはジムを後にし、ハナダシティに向かうためおつきみ山を目指します。

今日のジム戦では私のポケモンもお姉さまのポケモンもダメージを受けていないのでポケモンセンターによらずに向かいます。

おつきみ山に向かう途中、私たちは怪我をしたフシギダネを見つけました。

急いでポケモンセンターに連れて行って治療しなくては危険ですね。

ここまで傷ついているとポケモンセンターが遠いならともかく、近いならキズぐすりの様な下手な治療薬を使用している時間も惜しく、それよりもポケモンセンターで治療したほうが助かる確率が高いです。

お姉さまの勧めで私はモンスターボールにフシギダネを入れます。

モンスターボールには気休め程度ですが治療機能を備えており、怪我の進行を遅らせる効果があるそうです。

モンスターボールをイヴちゃんに預け、イヴちゃんがドードーに乗って全速力で麓のポケモンセンターに連れて行ってくれるそうです。

私たちも後から走って追いかけます。

ポケモンセンターの入り口ではイヴちゃんが待っており、フシギダネも問題なく助かるそうです。

イヴちゃんがジョーイさんに聞いた話だと、あのフシギダネのトレーナーはニビジムでバッチを貰ったことでテングになり、この辺に来るトレーナーに勝負を挑んでいたのだそうです。

でも、この辺に来るトレーナーは彼と同じくバッチを持つトレーナーばかり、慢心して勝てるわけもなく惨敗続き、仕舞いには自分のポケモンであるフシギダネに当たりだす始末だそうです。

そんな時、コイキング売りの親父が現れて伝説の黄金のコイキングとやらを彼に売ったそうです。

『今は弱いが、すぐに最強のポケモンになる』

『このあたりよりもおつきみ山を越えた先の水の町ハナダシティの辺りで育てたほうが成長が早い』

等と言われ、旅立ったそうです。

傷ついたフシギダネを放置して…そんなトレーナーのことはどうでもいいとして、フシギダネが目覚ますのは明日になるだろうとの事で、私たちも今日のところはここに泊まることにしました。

緊急事態のなり行きとはいえ、私がおやになった以上私が面倒を見るべきと、個室でフシギダネの看病を徹夜しました。

お姉さまとイヴちゃんも付き添ってくれていたのですが、ソファアでいつの間にか寝てしまっていました。

二人に毛布をかけ、看病を続けます。

明け方近くになり、いつの間にか寝てしまったらしく目を覚ますとお姉さまとイヴちゃんにかけた毛布を私は肩にかけていて、お姉さまたちは私の代わりに看病をしていていました。

フシギダネも意識を取り戻しており、だいぶ元気になっていました。

フシギダネも懐いてくれて、一緒に旅をするか聞くと頷いたので一緒に旅することになりました。

S i d e o u t

第10話 ミハル、ゴールデンブリッジ シゲル再び

Side ミハル

おつきみ山を出て、私たちはハナダシティにたどり着きました。

え？おつきみ山はどうしたのかですって？

特筆すべきことがないので省略します。

しいて上げるとするなら、私とお姉さまはそれぞれ、イシツブテ・パラス・パラセクト・ピッピ・ピクシー・ゴルバットを捕まえ、それプラス私がズバットを捕まえオニスズメがオニドリルに、フシギダネがフシギソウに進化した事、私が月の石を拾ったことくらいですわ。

私たちはまずジムで登録を済ませに行きます。

ジム戦は明日の朝1番には出来るそうなので予約をし、ポケモンセンターで宿の登録をします。

その後、私たちはゴールデンブリッジを越えた先にある湖に向かいます。

その湖はハナダシティでは有名なデートスポットで、とても綺麗な場所だそうです。

ゴールデンブリッジを渡ろうとすると向こうからシゲルがやってき

ました。

「2人とも久しぶりだねえ。」

「おや？そっちのレディは誰だい？」

「初めまして、イヴといいます」

「ボクの名前はシゲルだ、こちらこそよろしく」

「よろしくお願いします」

「それで、トレーナー同士が顔を合わせたんだポケモンバトルというじゃないか」

「私たちはこれから湖に行くのでお断りしますわ」

「湖はしばらく立ち入り禁止だそうだ。」

「ボクもさつき行って追い返された。」

「何でもドラマの撮影をやっているんだとか…」

「そういうことなら……時間つぶしにもなりますし

それで、どちらとバトルするんですの？」

「いずれ勝つつもりだが、今のボクではリカ君に勝つのは無理だからね

当然ミハル君、君だ」

「己の部を弁えているのはいいですが、言っていることは格好悪いですよ」

「ほつといてくれないかい……それで、受けるのかい？ 受けないのかい？」

「受けますわ」

「なら勝負は3対3全滅したほうが負けだ」

「わかりましたわ」

審判はお姉さまがやってくれるそうですわ。

「これよりポケモンバトルを開始する。

使用ポケモンは3体どちらかが全滅したほうが負けとする。

ポケモンの交代はなしとする。

試合開始！」

「頑張つて！オニドリル」

「行け！ピジョン」

私、空中戦は初めてですわ。

「オニドリル！エアカッター」

「ピジョン！かぜおこし」

オニドリルのエアカッターをピジョンはかぜおこしで軌道をずらします。

「ならば、ピジョン！でんこうせっか」

「それなら、つばめがえし」

オニドリルとピジョンが空中で交差する。

それから何度も空中でオニドリルのつばめがえしとピジョンのでんこうせっかがぶつかり合った。

結果ピジョンは戦闘不能、オニドリルは何とか勝つことが出来た。

「ピジョン、戦闘不能」

「戻れ！ピジョン」

次だ！行け！カメール！

カメール、みずでっぽう」

先ほどの戦いで、オニドリルの体力はほとんどなく、一撃で戦闘不能になった。

「オニドリル、戦闘不能」

「戻って！オニドリル！お疲れ様

お願い、フシギソウ」

「フシギソウだって！？ミハル！君の選んだポケモンはヒトカゲではなかったか！？シンジと交換したのか？」

「違いますわ、この子がまだフシギダネだった頃にニビシティからおつきみ山に行く途中で傷付いてたのを保護して、そのご縁で一緒に旅することになったのですわ」

「ああ、あの時のフシギダネか」

「知っているんですの？」

「ああ、ニビジムからおつきみ山に行く途中、フシギダネ1体でジムで勝ったとテングになったトレーナーとバトルしたんだ。」

フシギダネはそこそこ強かったがトレーナーが駄目で楽に勝てたのを覚えてる。

そのトレーナーとさつき湖の近くであってリベンジを挑まれた。

なんか伝説の黄金のコイキングを手に入れたとか何とか言ってたな。

それから金ぴかのモンスターボールから同じく金ぴかのコイキングを出して最強のポケモンがどうか：

結局、バトルは瞬殺バトルが終わる頃にはコイキングの体もメツキみたいで所々剥がれてたな。

それで、あの時のフシギダネはどうしたのか聞いたら、捨てたとかふざけた事を言っていたな

今ならまだ湖の辺りでコイキングを鍛えているんじゃないか？」

「フシギソウ、会いたい？」

私がフシギソウに聞くとフシギソウはフルフルと首を横に振って拒否します。

「お姉さま、イヴちゃん……その」

「別にいいわよ、どうしても行きたい訳じゃないし」

「私もいいですよ」

「2人とも、ありがとう」

「あゝ、話題を振ったボクが言うのもなんだけど、バトルを再開したいんだけど」

「あう、ごめんなさい」

「それじゃあ、試合再開！」

「カメール！あわだ！」

「フシギソウ、はっぱカッター」

カメールのレベルが高いらしく、相性の良いはずのはっぱカッターであわを相殺することしか出来ませんでした。

「フシギソウ、つるのむち」

「カメール！からにこもる」

からにこもったカメールをフシギソウはつるのむちを何度も叩きつけますがあまりきいていないようです。

「それなら…フシギソウ！カメールを思いっきり上空に放り投げて！」

フシギソウはつるのむちをカメールに撒きつけ、カメールを上空に放り投げます。

「フシギソウ！ソーラービーム！」

「カメール！ソーラービームを出させるな！ハイドロポンプ！」

上空からカメールのハイドロポンプが迫ってきます。

ハイドロポンプがフシギソウに当たる、その前にソーラービームのチャージが完了しました。

「ソーラービーム、発射！」

フシギソウのソーラービームはハイドロポンプを引き裂いて、上空で避けることの出来ないカメールに当たります。

カメールは戦闘不能になって落下しました。

「カメール、戦闘不能」

「戻れ！カメール！よく頑張ったな。

この勝負ボクの負けだが最後まで粘らせてもらっよ！

行け！コラッタ

コラッタ、でんこうせっかからひっさつまえば」

コラッタが凄い勢いで迫ってきます。

……まだ！まだ引き付けて……今！

「今ですわ！はっぱカッター」

コラッタは回避も間に合わず葉っぱの波に飲まれて戦闘不能になりました。

「コラッタ戦闘不能、ミハルの勝利」

「戻れ！コラッタ

今回は完敗だが次は勝たせてもらっよ」

そう言ってシゲルは去っていきました。

湖行きが中止になったので、私たちはポケモンセンターでのんびりすることにしました。

次の日朝一番にジムに向かう途中、近くの店で昨夜盗難事件があったというのが聞こえました。

S i d e o u t

地震の問題が一段落するまで凍結のお知らせ

タイトルの通りです。

3月の地震が起きてから、ポケモンの技にじしんやだくりゅうがあるため、落ち着くまで自主凍結していたこの作品ですが、

最近また地震が多くなってきましたので、この度正式に凍結することと決定いたしました。

今作品の更新を楽しみにしていた皆さん誠に申し訳ありません。

今まで、ありがとうございました。

状況が落ち着きしだい、また更新を再開させていただきます。

それでは、ご縁がありましたらまたお会いしましょう。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1802q/>

ブイ系と共に

2011年9月8日10時24分発行